

仏教文献『療痔病経』とその関連文献について

山中 行雄¹⁾, 山下 勤²⁾, 赤羽 律³⁾, 室屋 安孝⁴⁾

¹⁾ 佛教学部総合研究所, ²⁾ 京都学園大学, ³⁾ 大阪学院大学, ⁴⁾ ウィーン大学

受付: 平成22年7月7日/受理: 平成23年2月18日

要旨: 本論文は, 前稿「仏教文献に見られる呪術的療法の伝統について一概説一」(『日本医史学雑誌』第55巻第1号(2009)77-96)で紹介した『療痔病経』(Taisho No.1326)について扱う. この経は, タイトルが示すように呪文による痔疾患の治療を主題としたものである. 原文はサンスクリット語で書かれたものと考えられるが, サンスクリット原文は未発見であり, チベット語訳と漢訳のみが現存する. 本論文では, まず『療痔病経』について概説し, チベット語訳『療痔病経』の校訂ローマナイズ・テキストと和訳, 漢訳『療痔病経』の漢文テキストと和訳, ならびに『根本説一切有部律』に見られる『療痔病経』によく似た箇所(平行章句)の漢文テキストと和訳を示す. チベット語訳『療痔病経』テキストの複数の版を用いた校訂は今回が初めての試みである.

キーワード: 仏教, 呪術的医療, 呪文, アーユルヴェーダ, 療痔病経

1. 序

『療痔病経』における「痔」のサンスクリット原語は *arśas* であると考えられる¹⁾. 本稿ではこれを主に「痔」と訳す. *Skt. arśas* はインド伝統医学書『チャラカ・サンヒター』(CS6.14.6)では, 肛門・直腸周辺部および肛門内部の腫れ物であると定義されていることから, 英語の hemorrhoid あるいは piles (痔核) に近いものと考えられる. しかし, *skt. arśas* の定義に関しては, インド伝統医学(アーユルヴェーダ)内部でも諸説があったようである.

Demiéville (1930, 260) が指摘しているように, 『療痔病経』においては, 「痔」という語が, ulcer (潰瘍) に近い意味で用いられている箇所も見られる. 服部 (1968, 138) も『療痔病経』について触れ, 「痔病と瘡病とはほとんど同じような病気として扱われていた」と推測している.

しかし, 『療痔病経』の文脈における「痔」の意味を詳細に検討すると, 前述の『チャラカ・サンヒター』(CS)とは異なった伝統に属するイン

ド伝統医学書『スシュルタ・サンヒター』(SS)で定義される *skt. arśas* に近い疾患を指しているものと解釈することが可能である.

一方, サンスクリット語には *skt. arśas* とは別に, やはり痔疾患を示す語として *skt. bhagandara* (*pā. bhagandala*) という語がある. この語は, 英語の rectal fistula (痔瘻) に近いものと考えられるが, 漢訳仏典においては両語とも単に「痔」と訳されることが多く, 区別し難い.

以上のことから, 本稿では, 特に意味上の区別を必要とする際には, *skt. arśas* を「痔核」, *skt. bhagandara* を「痔瘻」と訳し分けることもあるが, 全体としては痔疾患の総称としての「痔」を *arśas* の訳語として用いた. いずれにしても, これらはインド伝統医学理論に基づく疾病概念として見るべきであり, これらの内には現代医学におけるいわゆる痔疾患と同様の症状を示すものが含まれるにしても, 現代医学の痔疾患とは概念を大きく異にするものである点には注意が必要である.

なお, 本稿で用いる仏教学・インド学の専門用語および略号の詳細については, 稿末の略語表を

参照されたい。

2. 『療痔病経』について

この経典のサンスクリット原本は未発見であるが、チベット語訳と漢訳が存在する。チベット語に翻訳された正確な時期は不明であるが、この経の翻訳者が、インド人 *Jinamitra* と *Dānaśīla*, そしてチベット人の *Ye śes sde* であり、また、『デンカルマ目録』(824年頃成立)に *g Zhang 'brum zhi bar byed pa* (痔を鎮める [経]) というテキスト名が記載されていることから、おおよそ9世紀初頭のチベットにおける仏教の前期伝播期に、チベット語に訳されたものと考えられる (Lalou, 1953, 328, No. 399)。

漢訳は、唐の義浄 (635–713年) によってなされた。義浄は671年に海路インドへ渡り、30余国を遊歴し、現在のマレー、インドネシアを経て695年唐に帰国した。この25年間に400部にも及ぶサンスクリット語の経論を収集したとされる。帰国後、義浄は収集したサンスクリット文献の翻訳を長安・洛陽で開始する。西域からやってきた実叉難陀らが協力し、漢訳された経典は56部230巻に及んだとされる。『療痔病経』は、唐景雲元年 (710年) すなわち義浄が76歳の時に翻訳されている (宮林・加藤, 2004, 449)。

義浄は、自身のインド・東南アジア遊歴を記した旅行記『南海寄帰内法伝』(Taisho No. 2125)を残しているが、その中で意外なほど多く紙数を割いてインド医学を紹介し、自らインドで医学を学んでいたとも記している²⁾。このことから、義浄が当時のインド医学について、相当な見識を持っていたことがうかがわれる³⁾。しかし、『療痔病経』については、義浄は『南海寄帰内法伝』では一切言及していない。

以上のようなチベット語および漢語への翻訳年代から、『療痔病経』のサンスクリット語原典が成立した年代の下限は、ほぼ7世紀半ばとすることができよう。前稿「仏教文献に見られる呪術的療法の伝統について—概説—」の第2章において、呪術療法に関する仏典群はおおよそ紀元後4–7世紀の間にインドで成立したものとみられるとした

が、『療痔病経』の成立年代もまた、この範囲に収まるものと考えられる。

また、漢訳『療痔病経』は敦煌・莫高窟でも1つの写本が発見されており、M. A. Steinにより英国へ将来された。この写本は現在、大英図書館に所蔵されている (Giles, 1957, No. 4029=S5379)。しかし、敦煌写本では経のタイトルは、『佛説痔病経』になっており、「療」の文字がない。他にも敦煌写本には、他の版のテキストとは異なった読みが多く見られるが、これらについては、本稿第4.2章 漢訳『療痔病経』のテキストの注に示すこととする。

漢訳『療痔病経』は、『大正新脩大藏経』では1ページにも満たない小品の経である。その内容は、ブッダがラージャグリハ (skt. *Rājagṛha*) にある竹林精舎 (skt. *Venūvana*) の迦蘭陀迦園 (skt. *Kalandakanivāpa, -nivāsa*) に五百人ほどの僧とともに滞在していた際、弟子のアーナンダから同所の僧たちが痔疾に苦しめられていると聞き、『療痔病経』を用いるよう勧め、この経の功德 (効能) を述べた後、『療痔病経』そのものを説く、というものである。

ここで、ブッダが『療痔病経』を説法した場所とされるラージャグリハの竹林精舎迦蘭陀迦園は、仏教経典には頻繁に登場する場所であり、非常に多くの経典がこの地で説かれたとされている。しかしこの経の教えとは別に、仏教の部派の一つである南方上座部では、痔瘻の切開を禁止していたとされているのであるが (Vin I 215, 26–216, 27. Zysk 1982, 73–74, Zysk, 1991, 114–115), この禁則が制定されたとされる場所も、まさにこのラージャグリハの竹林精舎迦蘭陀迦園である (Vin I 215, 29–30)。『療痔病経』を創作した人物は、痔の切除を禁ずる南方上座部の規則を知っていて、あえて『療痔病経』の舞台をこの場所に設定したとも考えられる。

3. 『療痔病経』平行章句について

『根本説一切有部律』は、根本説一切有部という仏教部派が所有した戒律文献である⁴⁾。この『根本説一切有部律』中の「尼陀那目得迦」章の「尼

陀那 (skt. *Nidāna*)」には、『療痔病経』と非常に近い章句が収録されている (『大正蔵』24, 420b7–420c7)。この『療痔病経』平行章句は、「尼陀那」中では『痔病経』とされているので、ここでは「尼陀那」の『痔病経』と呼ぶこととする。

「尼陀那」の『痔病経』は、痔に罹患した僧が、爪で患部を割り、激しい痛みを苦しんでいる様子を最初に語る。この僧の苦痛を感じ取ったブッダが、僧に一体何が起こったのかを問いただす。すると、ブッダは僧たちに爪などで痔を切り取ってはならないと説く。さらにブッダは、痔病を治す方法は、薬で治療する方法と、呪文によって治す方法の2種であるとし (『大正蔵』24, 420b18 原文：然治痔病有其二種。或時以薬或復禁呪)、爪などで痔を切取ったり、あるいは人に切取らせたりすることは、教団の規則に反するとして、痔の切除を禁じる。さらに、僧たちに『痔病経』を説法するので、これを受持するよう勧める。以下、『療痔病経』と極めてよく似た文言が続く。

『根本説一切有部律』は、サンスクリット原本が断片的にしか伝わっておらず、『痔病経』の部分のサンスクリット原文も未だ見つかっていない。

一方、チベット大蔵経においては「尼陀那」の『痔病経』に対応する箇所はウッタラグラータ (律上分, skt. *Vinaya-uttaragrantha*, tib. *'Dul ba gzhung bla ma & 'Dul ba gzhung dam pa*, Peking no. 1036/1037, Derge no. 7/7a) という戒律文献に見いだせる⁵⁾。しかし、このウッタラグラータ中の対応箇所は前半部分のみ、つまりブッダが爪などで痔を切取ったり、人に切取らせたりすることを禁じるところで終了し、ブッダが陀羅尼を教示する箇所は、完全に欠けている。

つまり、現在のところ漢訳『根本説一切有部律』中のみ、『痔病経』が残されているということになる。『根本説一切有部律』の漢訳は、『療痔病経』と同じく義浄によって695–713年になされたと伝えられている。また、前述のように『療痔病経』は710年の翻訳とされており、それはこの『根本説一切有部律』の翻訳時期と重なることになる⁶⁾。

4. 『療痔病経』のテキストと和訳

4.1. チベット語訳『療痔病経』のテキストと和訳

以下のチベット語訳『療痔病経』は、拡張ワイリー方式でローマナイズしたものである。使用した諸版と略号は以下の通り。

略号：D1=デルゲ版 (No.621), D2=デルゲ版 (No.1020), P1=北京版 (No.213), P2=北京版 (No.645), N=ナルタン版 (No.522), C=チョネ版 (No.218), S=トク宮版 (No.580), om.=omitted, ad.=added⁷⁾

4.1.1. チベット語訳『療痔病経』校訂テキスト

rgya gar skad du / Arya arsha pra sha ma ni sU tra / bod skad du / 'Phags pa gzhang 'brum rab tu zhi bar byed pa'i mdo /

sangs rgyas dang⁽¹⁾ byang chub sems dpa' thams cad la phyag 'tshal⁽²⁾ lo // 'di skad bdag gis thos pa dus gcig na /⁽³⁾ bcom ldan 'das rgyal po'i khab na⁽⁴⁾ 'od ma'i tshal bya ka lan da ka⁽⁵⁾ gnas pa'i tshal na⁽⁶⁾ dge slong lnga brgya tsam gyi dge slong gi dge 'dun chen po dang thabs cig⁽⁷⁾ tu bzhugs te /⁽⁸⁾ de nas bcom ldan 'das bco⁽⁹⁾ lnga'i gso sbyong zla ba nya ba de nyid kyi tshe⁽¹⁰⁾ dge 'dun gyi⁽¹¹⁾ mdun du⁽¹²⁾ gdan bshams pa la bzhugs so //⁽¹³⁾ de'i tshe tshe dang ldan pa kun dga' bo⁽¹⁴⁾ bcom ldan 'das kyi⁽¹⁵⁾ snam logs na mnga yab thogs te /⁽¹⁶⁾ bcom ldan 'das la g-yob cing 'dug par gyur to // de nas tshe dang ldan pa kun dga' bo bla gos phrag pa gcig tu gzar⁽¹⁷⁾ te /⁽¹⁸⁾ pus⁽¹⁹⁾ mo g-yas pa'i lha nga sa la btsugs⁽²⁰⁾ nas / bcom ldan 'das ga la ba de [r]⁽²¹⁾ logs su thal mo sbyar ba btud de⁽²²⁾ / bcom ldan 'das la 'di skad ces gsol to // bcom ldan 'das rgyal po'i khab 'di na⁽²³⁾ dge slong gzhang 'brum can mang po dag gzhang 'brum gyi bro nad kyis gzir te /⁽²⁴⁾ sdug bsngal mi bzad pa drag po mi bde ba⁽²⁵⁾ yid du mi 'ong⁽²⁶⁾ ba'i tshor ba myong bar gyur na / btsun pa bcom ldan 'das de dag la bdag gis ji ltar bsgrub par bgyi / de skad ces gsol pa⁽²⁷⁾ dang / bcom ldan 'das kyis tshe dang ldan pa kun dga' bo la⁽²⁸⁾ 'di skad ces bka' stsal to // kun dga' bo khyod

kyis gzhang 'brum sel ba'i mdo di⁽²⁹⁾ long shig // kun dga' bo gang⁽³⁰⁾ la la zhig gis⁽³¹⁾ gzhang 'brum sel ba'i mdo'i⁽³²⁾ ming dang /⁽³³⁾ tshig dang / yi ge shes na⁽³⁴⁾ de ji srid 'tsho'i bar⁽³⁵⁾ du⁽³⁶⁾ gzhang 'brum gyi nad kyis btab par mi 'gyur ro //⁽³⁷⁾ tshe rabs bdun gyi bar⁽³⁸⁾ du tshe rabs dran par 'gyur ro //

tadya thA⁽³⁹⁾ a lante⁽⁴⁰⁾ / *a ma le⁽⁴¹⁾ /⁽⁴²⁾ shwa li tsi ni⁽⁴³⁾ ku⁽⁴⁴⁾ she⁽⁴⁵⁾ *sambha⁽⁴⁶⁾ be⁽⁴⁷⁾ swA hA //⁽⁴⁸⁾ kun dga' bo 'di lta ste / byang phyogs na ri'i rgyal po gangs zhes bya ba de na⁽⁴⁹⁾ sa'a⁽⁵⁰⁾ la'i shing mnam par rgyal byed⁽⁵¹⁾ ces bya ba de'i me tog gsum yod de⁽⁵²⁾ /⁽⁵³⁾ gcig ni 'phel ba zhes bya / gnyis pa ni 'jam pa⁽⁵⁴⁾ zhes bya / gsum pa ni skam po⁽⁵⁵⁾ zhes bya ste /⁽⁵⁶⁾ ji ltar de bskams⁽⁵⁷⁾ pa de bzhin du⁽⁵⁸⁾ sems can mams kyi rlung gi 'brum bu bskams⁽⁵⁹⁾ par gyur cig / mkhris pa'i 'brum bu bskams⁽⁶⁰⁾ par gyur cig / bad kan gyi 'brum bu bskams⁽⁶¹⁾ par gyur cig / mi gtsang ba'i 'brum bu bskams⁽⁶²⁾ par gyur cig / khrag gi 'brum bu bskams⁽⁶³⁾ par gyur cig / 'dus pa'i 'brum bu bskams⁽⁶⁴⁾ par gyur cig / de bzhin du bdag dang sems can thams cad kyi bad kan gyi 'brum bu bskams⁽⁶⁵⁾ par gyur cig / mi gtsang ba'i 'brum bu bskams⁽⁶⁶⁾ par gyur cig / khrag gi 'brum bu bskams⁽⁶⁷⁾ par gyur cig / 'dus pa'i 'brum bu bskams⁽⁶⁸⁾ par gyur cig / sna'i 'brum bu bskams⁽⁶⁹⁾ par gyur cig / 'phyang ba'i 'brum bu bskams⁽⁷⁰⁾ par gyur cig /

tadya thA / sha me⁽⁷¹⁾ sha mA⁽⁷²⁾ ne⁽⁷³⁾ / sha me⁽⁷⁴⁾ sha mA⁽⁷⁵⁾ ne swA hA //⁽⁷⁶⁾ na bar ma gyur cig / rengs par ma gyur cig / sgra 'byung bar ma gyur cig / 'dzag par ma gyur⁽⁷⁷⁾ cig / sdug bsngal bar ma gyur cig /⁽⁷⁸⁾ rab tu sdug bsngal bar ma gyur cig /⁽⁷⁹⁾ zag par ma gyur cig /⁽⁸⁰⁾ rab tu zag par ma gyur cig /⁽⁸¹⁾ 'di nyid du zad pa dang / yongs su zad pa dang /⁽⁸²⁾ med⁽⁸³⁾ par gyur cig / sa'i⁽⁸⁴⁾ 'og tu song shig /

na mo *bha ga ba te⁽⁸⁵⁾ / *buddhA ya sa tya bA dI nAM⁽⁸⁶⁾ / *siddhyantu mantra pa dAni⁽⁸⁷⁾ /⁽⁸⁸⁾ swA hA /

bcom ldan 'das kyis de skad ces bka' stsal nas / tshe dang ldan pa kun dga' bo yi⁽⁸⁹⁾ rangs te / bcom ldan

'das kyis gsungs pa la mngon par bstod do // de⁽⁹⁰⁾ la chog⁽⁹¹⁾ ni 'di yin te / bklags⁽⁹²⁾ pas grub⁽⁹³⁾ pa 'di srad bu dmar po la lan bdun bzlas pa byas la / mdud pa bdun por te mgul du gdags so //

'phags pa gzhang 'brum rab tu zhi bar⁽⁹⁴⁾ byed pa'i mdo rdzogs so⁽⁹⁵⁾ //

rgya gar gyi mkhan po *dzi na mitra⁽⁹⁶⁾ dang / dA na shI la dang / zhu chen gyi lo tstsha⁽⁹⁷⁾ ba bande⁽⁹⁸⁾ ye shes sdes bsgyur cing zhus⁽⁹⁹⁾ te⁽¹⁰⁰⁾ gtan la phab pa⁽¹⁰¹⁾ //

Critical Apparatus (1) D2. P2. N. C. ad. / (2) N. 'tsha (3) P1. // (4) P. ad. // P2. C. / (5) P2. ka landA ka (6) N. ad. / (7) P2. C. gcig (8) P1. // P2. / (9) P2. C. bcwo (10) P2. N. / (11) N. gya (12) N. S. na (13) N. / (14) N. / (15) P1. kyis (16) P1. // P2. ste // (17) P2. gzer (18) P1. // (19) P2 bus? (20) D1. bcugs C. gtsugs (21) S 版のみ der, 他版 はすべて de (22) P1. pa (23) N. / (24) P1. // (25) N. / (26) P2. 'od (27) P2. ba (28) P2. la / (29) P1. C. om. (30) P1. om. (31) P2. om. N. gis / (32) P1. mdo (33) P1. om. (34) N. nas / (35) P2. par? (36) N. om. / (37) N. / (38) P2. par (39) P2. ad. / (40) P2. a lan ne (41) D2. P1. P2. C. a la me (42) P1. P2. om. / (43) N. S. / (44) P. kun, N. kur (45) D2. shi (46) P1. P2. C. sam bha S. N. saM bha (47) P1. D2. ba (48) D1. N. C. / (49) N. ad. / P2. nas (50) P1. N. sa P2. om. (51) N. S. ba (52) N. C. S. do (53) C. // (54) S. // (55) P1. P2. pa (56) P1. C. // (57) P1. P2. C. skam (58) N. / (59) P1. P2. C. skams (60) P1. P2. C. skams (61) P1. P2. C. skams (62) P1. P2. C. skams (63) P1. P2. C. skams (64) P1. P2. C. skams (65) P1. P2. C. skams (66) P1. P2. C. skams (67) P1. P2. C. skams (68) P1. P2. C. skams (69) P1. P2. C. skams (70) P1. P2. C. skams (71) N. ma (72) P1. ma (73) N. na (74) N. ma (75) P1. P2. ma (76) D1. P2. C. S. / (77) C. gyur / (78) P1. om. (79) P1. C. om. (80) P1. om. (81) P1. om. (82) P1. om. (83) S. nad med (84) N. S. om. (85) P1. P2. bha ga bA ti C. bha ga ba ti (86) P1. P2. bud dha sa tya pA (P2. bA) ti naM; N. buddhA ya / satya / bA

dī nAM; C. bud dha satya ba tī nAM; S. buddhA ya / satya / bA dA nAM (87) P. sid dhyān tu mantra bA de ni; P2. sid dhyān tu man tra bA da ni; D1. siddhyantu mantra pa daiH; C. sid dhyān tu man tra pa daiH; D2. N. S. sid dhyā ntu / mantra / pa dA ni (88) P. N. C. om. (89) P1. P2. yid (90) P1. da (91) P2. C. cho ga (92) P1. klags P2. blags (93) N. S. 'grub (94) P2. om. (95) P. sto? (96) P1. 'dzinna mi tra; P2. 'dzi na mi tra (97) S. tsa (98) P1. P2. bandhe; N. S. ban dhe; C. ban de (99) N. om. (100) N. om. (101) P2. po

4.1.2. チベット語訳『療痔病経』和訳

インド語で「痔を鎮静する聖なる経」(*Āryārsaprasamanisūtra*). チベット語で「痔を完全に鎮める聖なる経」(*'Phags pa gzhang 'brum rab tu zhi bar byed pa'i mdo*).

一切の仏と菩薩に帰命いたします。次のように、私は或る時間いた。世尊はラージャグリハの竹林精舎迦蘭陀迦園に、五百人ほどの比丘の大比丘僧伽とともに住しておられた。さて、世尊は15日の布薩日の満月の時に、僧伽の前に設けられた坐に座られた。その時、長老アーナンダは世尊の脇で法子を持って、世尊に(法子を)振りつつ座った。それから、長老アーナンダは衣を一方の肩にかけて、右膝で地に跪いて、世尊に向かって合掌し、お辞儀をして世尊に次のように申し上げた。世尊よ、ラージャグリハでは、痔(*tib. gzhang 'brum, skt. arśāngi*)を持つ多くの比丘達が、痔の病(*tib. bro nad*)によって苦しめられており、嘗て経験したことが無いほど耐え難く、酷く、不快である苦しみを経験したなら、尊者、世尊よ、彼らに対して、私はどのようにすべきでしょうか、と申し上げると、世尊は長老アーナンダに次の様に仰られた。

アーナンダよ、汝は痔を除くこの経を用いよ。アーナンダよ、およそ誰であれ、痔の除去の経の名前と言葉と文字を知れば、彼は命のある限り、痔の病に悩むことはなく、七つの生の間、生を思い起こすことになるだろう⁸⁾。

以下の通り (*tadyathā*):

alante amale śvalicini kuṣe sambhave svāhā

アーナンダよ、あるいはまた北方に、山の王ヒマーラヤという所に、征服者という名のサーラ樹の三つの花が存在する。一つは成長という名であり、二つ目は、柔和という名であり、三つ目は、乾涸という名であって、恰もその[花の]乾燥のように、諸々の衆生のヴァータ(*tib. rlung, skt. vāta, vāyu*)の腫れ物(*tib. 'brum bu, skt. visphoṭa*)を乾燥させよ。ピッタ(*tib. mkhris pa, skt. pitta*)の腫れ物を乾燥させよ。カバ(*tib. bad kan, skt. śleṣman, kapha*)の腫れ物を乾燥させよ。不浄の腫れ物を乾燥させよ。血(*tib. khrag, skt. rudhira*)の腫れ物を乾燥させよ。3つのドーシャの複合(*tib. 'dus pa, skt. saṃnipāta*) [によって生じた]腫れ物を乾燥させよ⁹⁾。このように、自身の、そして一切衆生のカバ(*tib. bad kan, skt. śleṣman, kapha*)の腫れ物を乾燥させよ。不浄の腫れ物を乾燥させよ。血の腫れ物を乾燥させよ。3つのドーシャの複合(*tib. 'dus pa, skt. saṃnipāta*) [によって生じた]腫れ物を乾燥させよ。鼻の腫れ物を乾燥させよ¹⁰⁾。垂れた腫れ物を乾燥させよ。

以下の通り (*skt. tadyathā*):

śame śamāne śame śamāne svāhā

病を為すな。血の流れを止めるな¹¹⁾。叫び声を挙げるな。漏れるな。痛みをあたえるな。全く痛みをあたえるな。漏れるな。全く漏れるな¹²⁾。このように、滅されよ、完全に滅されよ、(痔は)存在するな¹³⁾。[痔は?]地面の方へ行け。世尊、真実を語る人々の仏に帰命いたします(*namo bhagavate / buddhāya satyavādinām*)¹⁴⁾。真言の言葉は、成就せよ¹⁵⁾。スヴァーハー。

世尊がその言葉を仰って、尊者アーナンダは喜び、ブッダによって説かれたことを讃えた。そこで満足してそのようにして、誦誦して、完成し、この赤褐色の糸に七回囓いてから、七つ結び目を結んで、首に結びつけた。

「痔を完全に鎮める聖なる経」は終了。

インドの和尚 *Jinamitra* と *Dānaśīla* と大翻訳官 *Ye śes sde* が翻訳し校正した。

4.2. 漢訳『療痔病経』のテキストと和訳

以下の漢文テキストは、『大正蔵』の『療痔病経』(Taisho 1325, vol. 21, 490b21-491a5) を底本としているが、適宜『中華蔵』の『療痔病経』(H 944, vol. 36, 429a-c) 及び大英図書館蔵の敦煌写本 (Giles, 1957, No. 4029=S5379) を参照した。『大正蔵』に注記されている諸本の異読は、*v.l.* として、また敦煌写本の異読は「敦煌写本」として注に記した。

4.2.1. 漢訳『療痔病経』テキスト

佛説療痔病経⁽¹⁾ 大唐三蔵義浄奉制譯

如是我聞。一時薄伽梵。在王舍大城竹林園中。與大苾芻衆五百人俱。時有衆多苾芻身患痔病。形體羸瘦痛苦縈纏。於日夜中極受憂惱。時具壽阿難陀見是事已詣世尊所。頂禮雙足在一面立。白言世尊。今王舍城多有苾芻。身患痔病形體羸瘦痛苦縈纏。於日夜中極受憂惱。世尊此諸痔病⁽²⁾云何救療。佛告阿難陀汝可⁽³⁾聽此療痔病経。讀誦受持繫心勿忘。亦於他人廣爲宣說。此諸痔病悉得除差⁽⁴⁾。所謂風痔熱痔癰痔三合痔。血痔腹中痔鼻內痔。齒痔舌痔眼痔⁽⁵⁾耳痔。頂痔手足痔脊背痔尿痔⁽⁶⁾。遍身支節所生諸痔。如是痔瘻悉皆乾燥。墮落消滅畢差⁽⁷⁾無疑。皆應誦持如是神呪。即説呪曰

怛姪他 揭頼米 室利室利
魔揭室至 三磨鞞都 莎訶⁽⁸⁾

此呪(割注:丹藏云)

怛姪他 頰闍帝 頰藍謎 室利鞞
室里室里 磨羯失質 三婆跋覩 莎訶⁽⁹⁾

阿難陀於此北方有大雪山王。中有大莎羅樹名曰難勝。有三種華。一者初生二者圓滿。三者乾枯。猶如彼華⁽¹⁰⁾乾燥落時。我諸痔病亦復如是。勿復血出亦勿膿流。永除苦痛悉皆乾燥⁽¹¹⁾。又復若常誦此

經者。得宿住智⁽¹²⁾能憶過去七生之事。呪法成就莎訶⁽¹³⁾。又説呪曰

怛姪他⁽¹⁴⁾ 占米占米 捨占米 占沒儂 捨占泥 莎訶⁽¹⁵⁾

佛説是經已。時具壽阿難陀及諸大衆。皆大歡喜信受奉行⁽¹⁶⁾。佛説療痔病経⁽¹⁷⁾。

Critical Apparatus (1) 敦煌写本: 佛説療痔病経 (2) *v.l.*, 敦煌写本: 諸病苦 (3) 敦煌写本: 「可」を欠く (4) *v.l.* 殄, 敦煌写本: 殄 (5) 敦煌写本: 眼痔を欠いている (6) *v.l.* 糞門痔。尿痔よりも糞門痔という異読のほうが理解しやすいが、いわゆる *lectio facillior* か (7) *v.l.*, 必瘡, 敦煌写本: 必差 (8) 敦煌写本にこの陀羅尼はなく、次の陀羅尼と3番目の陀羅尼のみが記されている (9) 敦煌写本: 呵 (10) 敦煌写本: 花 (11) *v.l.*, 敦煌写本: 悉皆平復即令乾燥 (12) *v.l.*, 敦煌写本: 宿命智 (13) 敦煌写本: 呵 (14) 敦煌写本では「他」を欠いている (15) 敦煌写本: 呵 (16) 敦煌写本: 持 (17) 敦煌写本: 佛説療痔病経

4.2.2. 漢訳『療痔病経』和訳

仏説療痔病経 大唐三蔵義浄奉制譯

以下のように私は聞いた。ある時、私は、ラージャグリハの竹林園に五百人ほどの比丘サンガと滞在しておられた。その時、比丘には身体に痔病を患っているものが多かった。[彼らの]身体は弱り、やせ細り、痛苦は、[身体に]纏いつく[か]のようであった。[痔に罹患した比丘たちは]昼夜を通じて、ひどく憂い悩んでいた。その時、長老アーナンダは、この「多くの比丘が痔に苦しんでいる」事を見て、世尊のところへ詣でた。長老アーナンダは[ブッダの]両足に頂礼をして片側に立った。[長老アーナンダは]世尊に[次のように]言った。

「今、ラージャグリハに多くの比丘がおり、痔病を患い、身体は弱り、やせ細り、痛苦は、[身体に]纏いつく[か]のようであります。[彼らは]昼夜を通じて、一日中、憂い悩んでおります。

世尊は、これらの様々な痔をどのように治療されますか。」

ブッダは、アーナンダに告げられた。「汝は、この療痔病経を聞くのがよい。[この経を] 読誦して、受持し、心に繋げて忘れてはならない。また、他人に広く[この経を] 説きなさい。[そうすれば、] これらの様々な痔病を悉く取り除くことができる。すなわち、[その様々な痔病とは] 風痔、熱痔、癢痔¹⁶⁾、三合痔、血痔、腹中の痔、鼻内の痔、歯の痔、舌の痔、眼の痔、耳の痔、頭頂の痔、手足の痔、背中の痔、尿痔（肛門部の痔）[そして] 身体全体の関節部に生じる諸々の痔¹⁷⁾ [である]。このような痔がすべて乾燥し落ちて消え、すべて治ることに疑いをはさむことはできない。皆は、このような神呪を誦持すべきである。すなわち、その呪文に曰く：

怛姪他 揭頼米 室利室利 魔揭室至 三磨
鞞都 莎訶

この呪は（割注：丹藏では[次のように]云う。）

怛姪他 頰闍帝 頰藍謎 室利鞞
室里室里 磨羯失質 三婆跋靺 莎訶

アーナンダよ、これより北方にヒマーラヤという山の王がある。そこには、難勝という名前の大莎羅樹があり、三種の花を有している。一に初生、二に円満、三に乾枯[という花]である。まさに、この花が乾燥し落下するように、我の諸痔もまたそのように[落下するように]。また出血してはならない、また膿が流れてはならない。苦痛は永々に取り除かれ、[痔は] すべて乾燥せよ。あるいはまた、もしこの経を常に読誦する者があれば、その者は宿住智を得て、過去七生の事を思い出せるようになる。呪法は成就せよ。スヴァーハー。さらに[ブッダは] 呪を説き、[その呪に] 曰く：

怛姪他 占米占米 捨占米 占沒爾 捨占泥
莎訶

ブッダがこの経を説き終わった時、長老アーナンダと他の僧侶たちは皆大歡喜して[この経を] 授かり、[ブッダの言う通りに] 行じた。ブッダがお説きになった痔病を治療する経。

5. 『療痔病経』 平行章句のテキストと和訳

前述のように、漢訳『根本説一切有部尼陀那目得迦』 卷第一に『療痔病経』によく似た章句（平行章句）が見られる。以下はその漢文テキストと和訳である。テキストは『大正蔵』（Taisho 1452, vol. 24, 420b7ff）と『中華蔵』（H 964, vol. 39, 405b6ff）を底本として用いた。

5.1. 漢訳『根本説一切有部尼陀那目得迦』 卷第一 テキスト

於此城中時有苾芻。身患痔病。其頭下出。便以爪甲截去。極受苦痛逼切身心不能堪忍。便生是念。我遭此苦極為難忍。世尊大慈寧不哀愍。爾時世尊。由大悲力之所引故。至苾芻所問言。苾芻。汝何所苦。時病苾芻即便合掌。瞻仰世尊。憂情內感流淚哽噎。具以病苦而白世尊。佛告苾芻。豈我先時不遮汝等患痔病者不應截去。白言。世尊。佛已不許。若爾何故汝今作如是事。白言。世尊。爲苦所逼。佛言。爲苦逼故汝無有犯。今告汝等。雖患苦逼。不以爪甲等而截其痔。然治痔病有其二種。或時以藥或復禁呪。若有苾芻。雖遭苦痛。其痔不應自截。亦不使他截。如違教者得越法罪。爾時世尊告諸苾芻曰。此痔病經。我於餘處已曾宣説。今爲汝等更復説之。若誦持者必得除差。若有誦者。乃至盡形終無痔病苦¹⁾ 相逼惱。亦得宿命智。能憶過去世時七生之事。即説呪曰

怛姪他 阿魯泥（割注：去） 末魯泥鼻泥
俱麗婆鞞世沙婆鞞 三婆鞞 莎訶

汝等苾芻。若誦呪時復作是説。於此北方有大雪山王。中有大樹。名薜地多樹有三花。一名相續。二名柔軟。三名乾枯。如彼枯花至乾燥時即便墮落。我之痔病。或是風痔熱痔癢痔血痔糞痔及餘諸痔。亦皆墮落乾燥。勿復血出膿流致生苦痛。即令乾燥莎訶

又復呪曰

但姪他 苦謎 苦末泥 (割注：去) 莎訶

時諸苾芻聞佛説已歡喜奉行。

Critical Apparatus (1) 『大正藏』では「共」。ここでは『中華大藏經』の読みを採用

5.2. 漢訳『根本説一切有部尼陀那目得迦』巻第一和訳

この都城において、ある時、身体に痔を患っている僧が居た。その〔痔の〕頭は、下に出ていた。そこで、爪の甲で〔痔核を〕切取った。苦痛の感受が極まり、心身を圧迫したので〔苦痛に〕耐え忍ぶことができなかつた。そうして、〔僧に〕次のような念いが生じた。「私は、このような苦しみに耐えることはできない。世尊は、大いなる慈しみの心を持つというが、むしろ哀憐の情を持たないのではないか。」世尊は、大いなる憐愍の力によって、このことを知り僧の所に至り、問いかけた。「僧よ、何のために苦しんでいるのか。」その時、病気の僧は、すぐに合掌し、世尊を仰ぎ見て、憂いの情を心中に感じ、涙を流して嗚咽し、〔痔の〕病の為に苦しんでいると、世尊に言った。ブッダは告げた。「僧よ。私は以前に、汝ら痔病を患った者は、〔痔〕を切取ってはならないと〔痔の切除を〕遮らなかつたであろうか。」〔僧は〕答えた。「世尊よ。ブッダは〔痔の切除を〕許しませんでした。」「もし、そうであるなら、何故に汝は今、このようなことをしたのか。」〔僧は〕答えた。「苦しみが切迫していたせいです。」ブッダは言った。「苦しみが切迫していたので、汝は罪を犯してはいない。今、〔私は〕汝らに告げる。「苦しみが切迫しているといっても、爪の甲等で其の痔を切取ってはならない。」「そして痔病を治すには、次の二つの方法がある。或る場合には薬によって、或る場合にはまた呪文（禁呪）によってである。」「もし、僧が〔痔の〕苦痛にあつているといえども、その痔を自ら切つてはいけなかつたし、また他人に切らせてもいけない。もし〔このブツ

ダの〕教えに違えば、越法罪である。そのとき、世尊は僧達に告げた。「この療痔病経を、私は、或る場所（餘處）で既に集会に説法した。今、汝らの爲にこれをまた説法する。もし〔この経を〕読誦し心に受持する者は、必ず〔痔を〕取り除く。もし〔この経を〕読誦する者は、身体の形が尽きるまで、痔病の苦しみや〔痔の〕切迫するような悩みに相見えることも無い。また、宿住智を得て、過去七生の事を思い出せるようになる。すなわち、その呪文に曰く：

但姪他 阿魯泥 (割注：去) 末魯泥鼻泥
俱麗婆鞞世沙婆鞞 三婆鞞 莎訶

また、僧よ、汝らがもし呪を読誦する時は、このように説きなさい。これより北方にヒマーラヤという山の王がある。その〔山〕中には、大樹があり、〔それは〕薜地多樹という名前であり、三つの花を有している。一に相続という名で、二に柔軟という名で、三に乾枯という名である。まさに、この花が枯れて乾燥時に至り、すなわち落下するように、我の痔病も〔また落下するように〕。

あるいは、これが風痔、熱痔、癩痔、血痔、糞痔（肛門部の痔）及びその他諸々の痔も、また皆落下し、乾燥せよ¹⁸⁾。また出血して、また膿が流れ出て、苦痛が生じてはならない。すなわち〔痔を〕乾燥させよ。スヴァーハー。

また呪文に曰く：

但姪他 苦謎 苦末泥 (割注：去) 莎訶

僧達は、ブッダが説いたことを聞いた時に、歡喜して、〔歡喜〕終わって、〔呪文を〕行じた。

6. 結：『療痔病経』と『根本有部律』

『根本説一切有部律』は、サンスクリット原本が部分的に残っているだけで完本がなく、この「尼陀那」章も、未だサンスクリット原本が見つかっていない（本稿第3章）。したがって『療痔病経』と『根本説一切有部律尼陀那』中の『痔病経』との関係について、決定的な答えを出すのは

非常に困難である。

ただし、以下の二点は指摘できるだろう。「尼陀那」の『痔病経』では、「そして痔病を治すには、次の二つの方法がある。或る場合には薬によって、或る場合にはまた呪文（禁呪）によってである。」と説かれていた（本稿第5.2章）。これは実は、『根本説一切有部律』中の、主として僧団内での医療行為に関する規則が記載されている「薬事」という章でも説かれている（『大正蔵』24, 6c5-6痔病有二種療法。一者以呪。二者以藥¹⁹⁾）。この「薬事」では呪文も薬も具体的には示されていないのであるが、ともかく根本説一切有部が、痔の治療に際して、呪文の使用を認めていたことが伺える。上記のことは、他学派の痔の治療法を比較しながら、次稿で詳説したい。

それから、「尼陀那」の『痔病経』中で以下のような重要な言及があった：

此痔病経。我於餘處已曾宣説。今爲汝等更復説之。

この痔病経を、私は、或る場所（餘處）で既に集会に説法した。今、汝らの爲にこれをまた説法する。

ここでブッダは、別の場所で既に説法した『痔病経』を、再び説法すると言っている。解釈の一つとしては、『痔病経』は「尼陀那」章の成立以前からすでに存在しており、それが「尼陀那」中へ組み入れられたということであろう。つまり、『療痔病経』の原型たる『痔病経』が、『根本有部律』へ編入されたと仮説を立てることも、不可能ではない。

しかし前述の通り、この「尼陀那」章もサンスクリット原本は見つかっておらず、チベット語訳ウッタラグラントの対応箇所には陀羅尼が欠けている（第3章参照）。したがって『療痔病経』と「尼陀那」中の『痔病経』との関係について、現時点ではこれ以上論ずることはできない。しかし根本説一切有部のみが、痔の治療に際して呪文を用いることを許可していること、そして『痔病経』が

少なくとも漢訳『根本説一切有部律』には収録されていることの二点から、『療痔病経』が根本説一切有部と緊密な関係にあったことは確かであろう。今後、根本説一切有部と呪術的医療という視点から『根本説一切有部律』を研究することは、多いに意義のあることと思われる。

付記

本稿は、日本学術振興会 平成平成20~22年度年度科学研究費補助金 基盤研究(C)一般「インド伝統医学の理論と実践に関する調査研究」(課題番号20500878)による研究成果の一部である。

略号表

下記略号表中のパーリ語テキストは、すべてパーリ聖典協会 (*Pāli Text Society*) によって出版されているPTS版を使用した。サンスクリット語文献・漢文文献については、書誌を並記している。

- BHS Buddhist Hybrid Sanskrit 仏教混濁サンスクリット
- CS *Carakasamhitā* (インド医学書) *The Charaka-samhitā of Agniveśa revised by Charaka and Dṛiḍhabala*, ed. by Vaidya Jādavaji Trikamji Āchārya. Bombay, 1941. 4th ed., New Delhi, 1981.
- pā. *Pāli* パーリ語
- skt. *Sanskrit* サンスクリット語
- SS *Suśrutasaṃhitā* (インド医学書) *Suśrutasaṃhitā of Suśruta*, ed. by Vaidya Jādavaji Trikamji Āchārya and Nārāyaṇ Rām Āchārya. Bombay, 1938. 5th ed., Varanasi, Delhi, 1992.
- Vin *Vinaya* 律蔵 (南方上座部の戒律文献)
- Vin-a *Samantapāsādikā* (Vinの注釈書)
- Taisho No. 大正新脩大蔵経の目録番号
- 『大正蔵』 大正新脩大蔵経, 高楠順次郎他編, 大正一切経刊行会, 大正13年-昭和9年(再版: 大正新脩大蔵経刊行会, 大蔵出版, 昭和35-54年)
- 『中華蔵』 中華大蔵経, 中華大蔵経編輯局編, 北京: 中華書局, 1983-2004

敦煌写本 大英図書館所蔵写本『佛説痔病經』
(Giles, 1957, No. 4029=S5379)

注

- 1) パーリ語では *aṃsā, arisa*, 仏教混淆サンスクリットでは *arsāṅgi* である。
- 2) 『大正蔵』54, 223c9. 義浄は689年にスマトラに至り、『南海寄帰内法伝』を当地で書いた。その後691年に、本書は長安へ託送された。義浄のインド医学に関する記述は、宮林・加藤(2004, 275-303) 参照。
- 3) 義浄の『南海寄帰内法伝』中でのインド医学の記述、また義浄の医学関連の訳語には、様々な問題があり、これまでもよく議論された。そのことについては、稿を改めて紹介したい。
- 4) 榎本(1998)は、「根本説一切有部」という名称は、仏教の部派名としては不適當なものであるとしたが、八尾(2007)は、この見解を退けた。その後も仏教学者間に諸説があり、この論争に最終的な結論は見いだされていないが、本稿では「根本説一切有部」という従来の名称をそのまま用いることとする。
- 5) *Vinaya-uttaragrantha* ('*Dul ba gzhung dam pa, Gleng gzhi* = skt. *Nidāna*), P. *Phe*, folio 79b7-80a6; D. *Pa*, folio 82a2 (163)-82b1 (164): 『根本説一切有部律』中の「尼陀那目得迦」章とウッタラグラントの対応関係については、Clarke(2001); Clarke(2002)を参照。ウッタラグラントについては、岸野(2006)を参照。
- 6) このように、『根本説一切有部律』は七世紀末から八世紀初めに漢語に訳されたが、一方、チベット語にはおおよそ九世紀初頭に訳されたと考えられ、両翻訳には訳出年代の開きがある。この期間に『根本説一切有部律』自体が改訂されたようであり、漢訳とチベット語訳を比較すると、チベット語訳のほうがより新形を示している: 平川(1968, 729-736); de Jong(1968, 400-401)。したがって、『根本説一切有部律』の改訂プロセスにおいて、『痔病經』の陀羅尼はウッタラグラントから削除されたのかもしれない。そうであるにしても、削除の理由については不明である。
- 7) 『チベット大蔵經』の日本語による解説については、御牧(1987)および今枝(1989)を参照。
- 8) チベット文の直訳。一方、漢訳対応箇所では「得宿住智能憶過去七生之事」(過去の七生中のできごとを思い起こすことができる宿住智を得る)である。漢訳のほうが、仏教の伝統的な解釈である。しかし *Aparimitāyuh Sūtra* (≈『大乘聖無量壽決定光明王如來陀羅尼經』Taisho No.937 etc.) などには, *yatra yatra janmany upapadyate, tatra tatra sarvatra jātau jātau jātismaro bhaviṣyati* (およそ, どの生に再生するとしても, その各々の生すべてで, それぞれの [前] 世についての宿命智があるだろう: テキストはHoernle(1916, p.311)を使用)といい、将来転生した後で前世の想起が生じることを示唆しているようにも解せる。したがって、当該箇所「七つの生の間」を「これからの七つの生」と解釈することも不可能ではない。
- 9) *saṃnipāta* とはインド伝統医学の用語で、3つのドーシャ(病素)(skt. *doṣa*) (ヴァータ (skt. *vāta*)・ピッタ (skt. *pitta*)・カパ (skt. *kapha*) が複合して、病気の原因となる状態のこと。次稿第1章で詳説する。
- 10) ここに列挙されている諸々の腫れ物については、次稿第2章で詳説する。
- 11) チベット文の直訳。血の流れと痔疾の関係はここでははっきりしない。
- 12) 「漏れる」(tib. *zag pa*) の原語は skt. *āsrava* であるが、ここでは「(膿や血が) 漏れるな」と解釈する。
- 13) *zad pa* の原語は, *kṣīṇa* と想定し, 「減す」と解釈する。
- 14) 原文では *-bāṭinam*
- 15) デルゲ版・チョネ版では, *siddhyantu mantrapadaih* (真言の言葉によって成就せよ) であるが、他の諸版の読みを採用して「真言の言葉」を主格と考えた。「真言の言葉」が主格であるなら, *mantrapada* は中性名詞なので *siddhyantu mantrapadāni* が文法的に正しいものとなる。一方、『孔雀明王呪經』には, *siddhyantu mama mantrapadāh svāhā* (私の真言の言葉は成就せよ, スヴァーハー: テキストは田久保(1972, 13, l.16)を使用) という, *-pada* の男性名詞的な格変化が見られる。*-pada* は本来中性名詞であるが、『孔雀明王呪經』内では *-pada* は中性名詞としても男性名詞としても用いられている(中性名詞の変化: *imāni cātra mama mantrapadāni bhavanti* そして, そこでは私の真言の言葉が成り立つ: 田久保(1972, 29, ll.14-15))。しかしパーリ語など中期インド語では, *pada* が主格複数形で *padā* と男性名詞と同じ変化をすることは稀ではない。『孔雀明王呪經』のこのような名詞の性に関する混乱は, おそらく中期インド語の影響を受けたためと思われる。
- 16) この「癩」(諸橋轍次『大漢和辞典』, No.22480) という漢字には、「胸の病」または、「血の痕」といった意味がある。しかし義浄は『南海寄帰内法伝』(『大正蔵』54, p.224a16)で、この字をインド医学のドーシャ(病素)のうちのひとつである「カパ」(*kapha*)の訳語として用いている: 遠藤・中村(1995, 1); 遠藤他(1993/09, 335, 表1); 宮林・加藤(2004, 286)。漢訳仏典における「癩」の意味、またこの語の中国医学文献における受容に関しては、遠藤他(1993/09); 遠藤他(1993/12); 遠藤他(1994)参照。
- 17) ここに列挙されている痔については、次稿第2章で詳説する。
- 18) ここに列挙されている痔については、次稿第2章で詳説する。
- 19) チベット語訳対応箇所(デルゲ版No.1 *Ka Folio* 585, 6)は, tib. '*on kyang gzhang 'brum gyi dpyad ni rnam*

pa gnyis kyis bya ste / gsang sngags dang / sman gyis so //
 (しかし痔の治療は二種の方法でなされるべきであっ
 て, [それは] 真言と薬によってである。)

参考文献

- [1] Demiéville, P.: *Byô in Hôbôgirin. Dictionnaire encyclopédique du Bouddhisme d'après les sources chinoises et japonaises.*, Maison Franco-Japonnais., 224–265. 1930.
- [2] 服部敏良『釈迦の医学』黎明書房, 名古屋, 1968.
- [3] Lalou, M.: *Les textes bouddhiques au temps du Roi Khri-sron-lde-bcan.* Journal Asiatique, 241, 313–353. 1953.
- [4] 宮林昭彦・加藤栄司『現代語訳 南海寄帰内法伝 七世紀インド仏教僧伽の日常生活』法蔵館, 京都, 2004.
- [5] Giles, L. (ed.): *Descriptive Catalogue of the Chinese Manuscripts from Tunhuang in the British Museum.* London, Trustees of the British Museum. 1957.
- [6] Zysk, K. G.: *Studies in Traditional Indian Medicine in the Pāli Canon: Jīvaka and the Āyurveda.* The Journal of the International Association of Buddhist Studies, 5/1, 70–86. 1982.
- [7] Zysk, K. G.: *Ascetism and Healing in Ancient India. Medicine in the Buddhist Monastery.* Delhi, Oxford University Press. 1991.
- [8] 榎本文雄「『根本説一切有部』と『説一切有部』」『印度學佛教學研究』47, No.1, 400–392頁, 1998.
- [9] 八尾史「『根本説一切有部』という名称について」『印度學佛教學研究』55, No.2, 897–894頁, 2007.
- [10] Clarke, S. 「The Mūlasarvāstivāda Vinaya Mukṭaka 根本説一切有部目得迦」『仏教研究』, 30, 81–107頁, 2001.
- [11] Clarke, S. 「The Mūlasarvāstivādin Vinaya. A Brief Reconnaissance Report」『初期仏教からアビダルマへ：櫻部建博士喜寿記念論集』平楽寺書店, 京都, 45–63頁, 2002.
- [12] 岸野亮示「2つの『ウッタラグラント』: 「ウパーリ問答」の考察」『印度學佛教學研究』55, No.1, 385–382頁, 2006.
- [13] 平川彰『初期大乘仏教の研究』春秋社, 東京, 1968.
- [14] de Jong, J. W.: *Les Sūtrapitaka des Sarvāstivādin et des Mūlasarvāstivādin in Mélanges d'indianisme: à la mémoire de Louis Renou; 40e anniversaire de la fondation de l'Institut de Civilisation Indienne de l'Université de Paris,* 1967. Paris, Édition E. de Boccard., 395–402. 1968.
- [15] 御牧克己「チベット語仏典概観」長野泰彦・立川武蔵(編)『チベットの言語と文化/北村甫教授退官記念論文集』冬樹社, 東京, 277–314頁, 1987.
- [16] 今枝由郎「チベット大蔵経の編集と開版」長尾雅人他(編)『チベット仏教』岩波書店, 東京, 325–350頁, 1989.
- [17] Hoernle, A. F. R.: *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan. Vol. I.* Oxford, The Clarendon Press. 1916.
- [18] 田久保周誉『梵文孔雀明王經. Ārya-Mahā-Māyūri Vidyā-Rajñī』山喜房佛書林, 東京, 1972.
- [19] 遠藤次郎・中村輝子「アユルヴェーダのトリドローシャ説と仏教医学の四大不調説の比較検討」『科学史研究. 第II期』34, No.193, 1–9頁, 1995.
- [20] 遠藤次郎・中村輝子他「痰の起源—1—漢訳仏典にみられる痰の検討」『日本医史学雑誌』39, No.3, 333–345頁, 1993/09.
- [21] 遠藤次郎・中村輝子他「痰の起源—2—梁以前の医書にみられる「痰」の検討」『日本医史学雑誌』39, No.4, 543–553頁, 1993/12.
- [22] 遠藤次郎・中村輝子他「「欬」の病の起源—仏教医学の病とのかかわり」『日本医史学雑誌』40, No.4, 435–446頁, 1994.

A Study of “The Sūtra of the Tranquilization of Hemorrhoids” and Other Relevant Material

Yukio YAMANAKA¹⁾, Tsutomu YAMASHITA²⁾, Ritsu AKAHANE³⁾
and Yasutaka MUROYA⁴⁾

¹⁾Bukkyo University Research Institute, ²⁾Kyoto Gakuen University,

³⁾Osaka Gakuin University, ⁴⁾Universität Wien

The present paper focuses primarily on a philological and historical study of the Arśaprasāmanisūtra (“The Sūtra of the Tranquilization of Hemorrhoids”). This Sūtra is one of the Buddhist scriptures that are characterized by the magico-religious treatment of various diseases, especially by means of “healing spells” (skt. dhāraṇī or mantra), as shown by the preliminary survey in our previous paper “The Tradition of Healing with Magical Spells as Seen in Buddhist Texts,” *Journal of the Japan Society of Medical History* 55/1 (2009), 77–96. The original text of the Arśaprasāmanisūtra, most probably written in Sanskrit, is lost whereas its Chinese and Tibetan translations have survived. After an introductory summary, we provide critically edited texts of the Tibetan and Chinese translations accompanied by their Japanese translations with critical notes and annotations. In particular, the Tibetan translation presented here has been critically edited for the first time on the basis of collation of the five editions of the Tibetan Buddhist Canon. In our next paper we will analyze the descriptions of hemorrhoids as found in the Sūtra in comparison with those illustrated in classical Āyurveda literature. And we will also offer further observations about the methods and principles for the treatment and healing of hemorrhoid that are attested in Buddhist scriptures.

Key words: Buddhism, magico-religious medicine, healing spells, Āyurveda, Arśaprasāmanisūtra